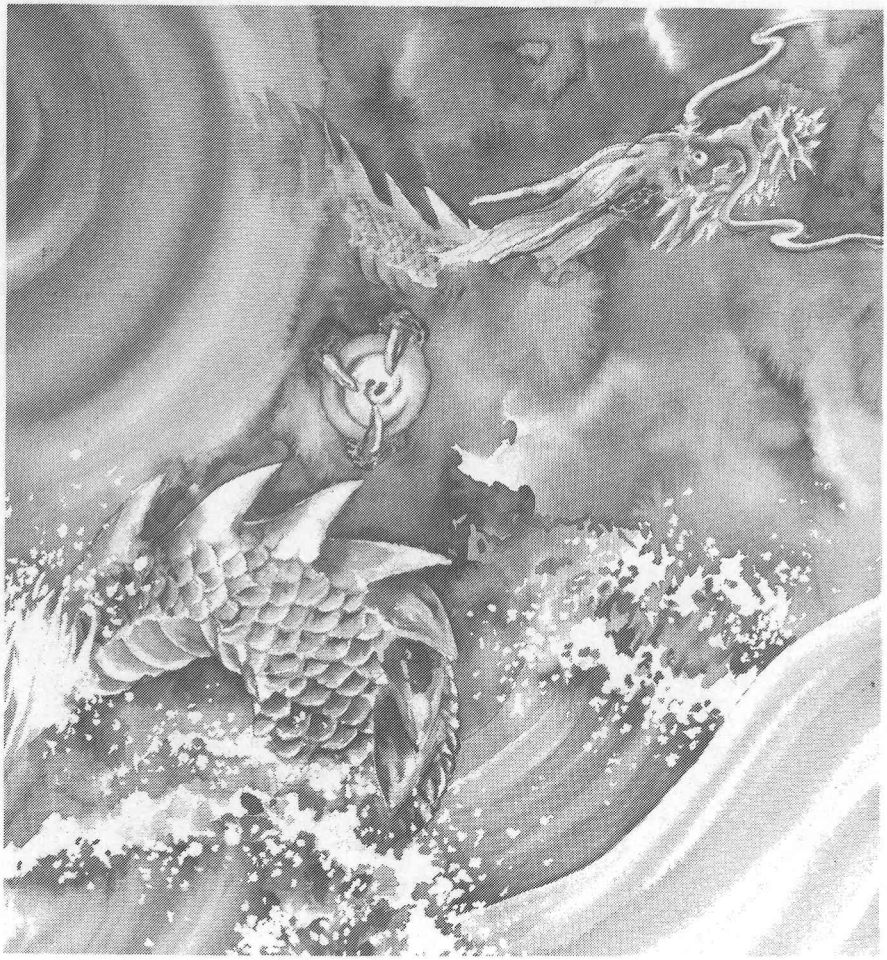
季刊　連句　第20号

昭和六十三年三月一日発行



季刊連句　第20号　目　次

阿蘇にて（南柏雑記　18）……1

恋句特集
現代恋句小論……東　明雅……2
恋句あれこれ……（故）根津　芦丈……4
付句における恋の倒錯……杉内　徒司……6
恋句雑感……小出きよみ・坂本孝子・市野沢弘子……8

「市中は」の巻鑑賞（Ⅵ）……東　明雅……10

歌仙　女正月……捌　東　明雅・文　式田　和子……14

「蓑虫」付勝練習二十韻……16

第二十四回　猫蓑会　二十韻　六巻　捌　小川弥生・井手欅晴・坂本孝子…18
副島久美子・八角澄子・若尾よしえ

沙羅の会　脇起り百韻　二巻　葱白く……捌　氏原　正雄・馬場　彬風……20

波郷先生の連句に思う……下鉢　清子……24

四宮連句会　歌仙　勤労感謝の日……捌　東　明雅……26

両吟二十韻　山に山……原　裕・中島　啓世……文　啓世……27

アメリカ便り……竹本　義人……28

新刊紹介
小出きよみ著「あさって」……9
阿部　正美著「芭蕉連句抄　第十篇」……9
清水　瓢左著「蕉風連句の髄」……9
雲英　末雄著「芭蕉連句古註集　猿蓑篇」……28

雁帛往来・連句会案内……29

表紙（昇り龍）　宮　崎　龍火子

阿蘇にて

南柏雑記 18

雅

阿蘇の内の牧温泉、「蘇山郷」は古いけれども貫禄のある宿だった。昔は宿屋を業とせず、和歌好きの素封家の邸で、与謝野鉄幹・晶子夫妻を招いて歌会をしたらしく、内の牧城の大杉一本で建てた室など、実に見事なものであった。六間半の縁側の長押に直径四、五十糎はあろうと思われる一本の巨木が使われていたので、ああ、これが大杉というものなのかと思って、あとで聞いたらこれはその大杉の枝で、肝腎の大杉は製材して、柱となり、床となり、天井となっておよそ五十畳の室全部の用材を賄ったのだと聞いて、ちょっとびっくりした。「大きなるひと木の杉を阿蘇に斫り、君が造れる万年の家」と鉄幹はその家を壽いだが、その家もよる年浪には勝てず、今年早々取りこわして新しいホテルを建てるそうだ。なるほど鉄幹、晶子の時代のものだから古いことは古い。しかし、この見事な一木の杉で建てられた家も毀されて、近代的設備の整ったホテルに建て替わる。それは時代の流れで致し方のないことだ。

そう言えば、二十韻という新しい形式の連句をふっと思いついて、初めて作ったのは東京神田の「万代」という古い旅館であった。ここは岐阜の国島十雨さんの御親戚のお宅で震災、戦災を耐えぬいた建物は、自らの風格があって、磨きこまれた廊下、天井などまっとうな用材をまっとうな職人が建てたものだということが一目で分かった。

ニコライの鐘も師走の旅籠町　十雨
冬の紅葉のまだ朱き庭　明雅

ではじまる「師走の町」(八号所載)には、その時の感激がなお残っているが、これも今は取り毀されて、あとには現代的鉄筋造りのビルがそそり立っている。

不思議なことにあの「万代」で「師走の町」を巻いたのが昭和五十九年十二月五日であったのに、「蘇山郷」に私が泊ったのが、昭和六十二年十二月四日であったのも、何か不思議な因縁があるような気がする。

このまる三年間、私は二十韻とともに生きて来たようなものであった。私が「季刊連句」の編集人と発行人とを兼ねるようになってから、ことに二十韻の数が多くなった。それを早速見抜いて、「本号から先生が編集人発行人も兼ねられ、『二十韻』誌に本格的になったと思いました」とハガキを下さった炯眼の方も居られる。もちろん、二十韻は未完成で、いろいろの利点とともに欠点もある。しかし、「花の冷え」(「連句辞典」所載)や「青時雨」(十一号所載)のような作品は、十分に歌仙と対抗できるものを持っていると思うが、いかがであろう。

恋句特集

現代恋句小論

東　明雅

現代連句の恋句を語る上で、どうしても無視出来ないのは小出きよみさんの「恋句曼陀羅」（昭和五十七年刊）であろう。この本は、きよみさんがその全作品の中から、ことに気に入った恋句のみを抄出して纏められたものである。この本の序文を求められた時、私は次のように書いている。以下、やや長文であるがその一部を引用させて貰う。――

「恋愛は人生の秘鑰なり」とは、明治の詩人北村透谷の至言である。これに倣って言うならば「恋句は俳諧の秘鑰（連句の文芸性の秘密を解く鍵）なり」と言ってよいだろう。事実、たとえば歌仙三十六句の中には二花三月と言って、花、月の句は特に賞美・珍重されるが、私の見るところでは、これは連歌時代からの遺物であり、連句で最も中心となり、賞美・珍重さるべきは、実は恋の句であると思う。そのことは芭蕉の恋句のすばらしさが、彼の俳諧に単にいろどりを与えているだけでなく、むしろ、恋句を通じて表現された「艶」と「しをり」とこそが、いわば彼の俳諧の文芸性の中心をなしていることに思いいたせば、十分に納得されうるところであろう。

その筆法を用いれば、きよみ連句の神髄はこの恋句の中に潜んでおり、きよみ連句を理解鑑賞する鍵も、この恋句の中にあると言ってよいだろう。そして、連句でなければ、短歌でも詩でも川柳でも表現できない恋の諸相と、「艶」と「しをり」とが、この書の読者に理解・共感されるならば、それはおのずから連句の愛好者、また実作者を増やすことにもなろう。――

私は、今もこの文章を否定しないし、私の連句に対する最も中心的な考え方の一つである。ただ、付け加えたいところがあるので、以下、具体的に述べてみたい。

まず、第一に和歌でも詩でも川柳でも表現出来ない恋の諸相というのは何を指すのか、それが曖昧であった。一口に言えばそれは恋句に俳諧性を持たせるということであろうが、俳諧性とは、芭蕉の言うように、卑俗なるものの中に雅なるものを求め、「軽み」と「滑稽」の中に、真実の感動をもたらすものであろう。

もちろん、「恋句曼陀羅」の作品の中には、軽みと笑いをもったものもあったが、

王冠を賭けし世紀の恋もあり　　魚魯
　ミンクのコート露地を抜けゆく　　芹川

胸元に袖を合はせる秋袷　　きよみ
　眉ぬれぬれと蛇身隠して　　同

のような、この書の代表作と目される作品が主流で、「艶」と「しをり」とは確かに十二分であったが、軽みと滑稽は割合に乏しかったのではあるまいか。連句が座の文学であることから考えても、軽みと滑稽が恋の句にも、もすこし必要な気がする。その点、

　嘘のキッスが本物となり　　昌子
　親が居て子が居て電話ままならず　　妙子
　ばりばりと炒るちぎり蕓蒻　　千町

へっぽことおかちめんこと終の家　　譲介
　湯婆がはり抱かるるもよく　　きよみ

など、近頃の「季刊連句」には漸く、「軽み」と「をかしみ」が出て来たように感ずる。芦丈翁は私どもに、「恋の二句目で笑わせる」と言われた。ともかく、恋句をもっとおもしろくすること、ことに、名残の表の恋は、すこし濃厚で、三句位続けるのが理想であるが、その三句目で、どっと一座の連衆が腹をかかえて笑うようなものが欲しい。

　現代ほど性の問題が解放的になったことはなかった。昔と言っても昭和二十年までは「男女七歳にして席を同じうせず」とか、「不義はお家の御法度」とかの儒教倫理が、重く庶民の上にのしかかっていた。だから、それを犯した昔の恋物語は皆「あはれ」で「しをり」があったのだ。今は性を人間解放の道として、讃美し謳歌している。若い人たちはみな恋を享受し不義も不倫も認めようとしない。そのような恋のどこに「あはれ」があり、「しをり」があろう。社会一般がそうである。しかし、人間たる以上、恋の悩みを知らぬ者は現在でもない筈である。だから、その悩みの実態をつかみ、思いもよらぬ現代人の悩み、苦しみを現わすことはできよう。連句とは大体虚構の上に成り立つものである。もし、和歌や俳句ならば作者自身のこととして、社会的に指弾されるようなことも、連句ではその作者の才能を示すものとして賞められこそすれ、決して咎めだてられはしない。

　雑沓まぎれ嫂の瞳よ　　正江
　過ぎし恋歪んでダリの絵のやうに　　千町

前句、雑沓の中で嫂の瞳を意識した男、その時の情感は喜びか、悲しみか、おそれか、この作者は何も言っていない。それだけに読者の空想はひろがり、僅か十四字で数千字の小説、あるいは数時間の演劇を想像させる力を持っている。表面的なキスとか、モーテルとか言った語を安易に使った恋句とは全く違うものである。貞門の時代までは恋詞というものがあって、その語を使うことによって恋句が成立した。それを打ち破ったのが芭蕉である。現代の恋句もこの芭蕉の精神をもう一度振り返る必要があると思う。

先師の教え

芦丈先生が連句専門誌「山襖」を発刊されたのは、昭和三十九年一月のことで、先生はこの時正に九十歳であった。そして、四十三年二月、九十四歳で逝去されるまで、ほぼ隔月に二十四号まで続いている。この中で先生はいろいろのことを教えられたが、恋句に関する記事も二、三あって、今となってはみな貴重な資料となった。

そのうち第七号に載せられた「恋句あれこれ」という一文を、特に御遺族根津芙紗さんにお願いして許を得、ここに転載できたのは、弟子として私の何より嬉しいところである。伊勢派の中で、どのような恋句が評価を得ていたかを知ることは、俳諧史の興味ある問題であるとともに、その教えは現在の連句における恋句の作り方・味わい方にも十分の示唆を与えるものである。

（明雅）

恋句あれこれ

（故）根津芦丈

二神此世にあれましよりこの方で、恋は人生の花である。連句に於て恋句のない巻は一巻とは云えぬ。哥仙に於て二ケ所、一折に一ケ所づつで定座はない。前句次第で早い時もおくれる時もある。恋には成功の恋もあり失敗の恋もある。恋は男一人でも女一人でも成立たぬそれも句柄によって成立つ場合もある。いろいろあるから二、三あげて見る。

買はれ行けとはむごき一言
　このような美人に何で産れしか
せっぱつまって、どうしてもそうするより外に道はない、父か母が涙をふるっての一言である。自分は美人であるが、嬉しくて嬉しくてくらしていたが、こんなことになるのも美人であるがためであると悲しむ。無論遊女に売られるのである。

ちさき店出して櫛田の出はづれに
　二親の日もまいる墓なき

若者同志が、親のゆるさぬ恋の末、二人で手をとりて家出をした。旅先でさんざ苦労をなめつくした末に、櫛田（伊勢）の町はづれに小さいながら店を出して、漸く生活出来るようになって、よかったと二人で顔を見合せる。

だがこんなに遠く故郷を離れては、二親の命日にもおまいりするお墓もないと、うち沈む。恋言葉はないが立派な恋句である。

濡足袋で直に火達へ辷りこみ
教えて云はす掛のことはり

忍んで来た男が、ぬれた足袋のまま火達へ這入りこむ折りも折り掛乞が来たのに対し、主人は折りあしく他出してるすであると、教えて云わすと云う寸法。之も恋言葉のない恋句である。

むりむりと末の娘をもらひかけ
障子の外を走る袖の香

媒人が何回も何回も来て是非にと、云う処であるがいつもよい返事はきかれぬ。娘はどうしてもいやだと云うのに、又来たのかうるさいと障子の外をにげる。このような恋句もある。

たった一度で浮名たてられ
腰かけて居てもつまらぬ階段也

旅館の女中かなんであろう。酔って寝たお客さんへ気をきかして、コップを添えて水を持って行って、お客さんにやさしい言葉をかけての出来ごとであろう。浮名つまらないと、朝の掃除を終っても直に部屋へも行かず、階段に腰をかけている。変った恋である。こんな前句に対しては、余程要心して附けぬと、川柳の領分へ飛び込んでしまう。遊び場である処の二の表的の句である。

政子の石のぬくき人肌
膝なんど濡らして給ふと稚児を抱き

鶴が岡八幡の境内にあった女陰石である。あまりに女陰に似ている処からか、何処かへ移して今は八幡様の境内にはないとのことだ。この一連は児を欲しい人と、安産の御礼参りの人とが落合って。マア佳い赤ちゃんだ、一寸私に抱せてと頼む、その赤んぼに「オシッコして膝を濡らして給ふ」と呼びかける。其姿に対し赤んぼの母親は勿論父親も、にこにこして見ているさまである。猶「給ふ」の一語でこの両者の人柄も立派な人々であることが知れる。

赤ン坊に尿で濡らされると、子供が出来るとの迷信は今もある。美しい恋句である。

長刀擡す門の入口
人と人重なり合てうち臥せり
盗まれ出づる命あやうき

いく昼夜も寝ずに戦い勝って、引揚げた武士たちが眠りこけて居る体と見ての附句である。この前句に対し誰も頭をしぼったが、なかなか附かぬ。やや程へてから樗良が附けてあっと云わせた有名な附である。

飲まず食わず戦った武士に、敵の大将の夫人か娘かが人質にとらえられ居るのを、大豪の忠臣がひそかに忍びこんで救い出だす。誠に命あやうしである。樗良は一夜四吟の内の一人でもあり、天明のあの中にても連句に於ては、五俳仙中にも樗良に及ばぬ人もある程の名人である。

火中より千姫を救い出したる坂崎には恋の意味もあるが、この一連には恋の意はない。　（山襖第七号より転載）

付句における恋の倒錯

杉内徒司

男が女の自の恋句をつくり、女が男の自の恋句をつくる――これを連句の付句における恋の倒錯と云う。

例句を他人の作から選ぶのは失礼なので、徒子と名乗っていた頃の拙句を『朴の花』からひろってみる。

伊豆のどこかであひ引の約　武翁
ぶらじあをとりて一応身をよぢて　徒子

「颱風」（昭和42・9）

正妻持たぬことを家憲と　武翁
等身の鏡に誇る雪の肌　徒子

「栗飯」（昭和42・10）

角巻とればあでやかな装（なり）　武翁
君の脊に思ひのたけの爪を立て　徒子

「銀杏」（昭和42・12）

問へば指さす喉の傷跡　武翁
妻ありと知れど溺れて行く心　徒子

「城址の初夏」（昭和43・5）

痩せたいと今日も体操一心に　武翁
若き亭主を持ちし気詰り　徒子

「春日遅々」（昭和43・7）

男が女の自の句をつくることにすこしも疑問をもたなかった私が、問題を感じたのは次の一節を目にした時である。

篠の屑家も住めば愛の栖　洞光
肥桶の片棒かつぐも嬉しげに　芦丈

この附句はじめは「嬉しくて」であったがそれでは女の自の句になる、男が女の自の句では蕉風の埒外のものだから一直他の句にした。（根津芦丈三回忌追善集『芋日記』）

『芋日記』は四十五年九月刊、『朴の花』は同年十月刊だから、この二書をよみくらべたのは四十五年秋の頃であり、この年は連句復興の年に当ると後年識者から指摘されているのを考えると感慨深いものがある。

この芦丈の指摘にやや動揺を覚えたのは四十一年六月十日から連句を始め約五十巻の実作の経験をした頃であり、そもそも、詩歌俳諧というものは上手に嘘をつくものであるとわきまえていた頃でもあった。

三千世界のカラスを殺し
　主と朝寝がしてみたい

は「自他伝」の伝で云えば女性の自の句だが、幕末の男の中の男、高杉晋作がものした都々逸であり、小説家が異性に感情移入をして物語を展開するのはごく普通ではないか。

しかし、俳諧ではどうあるべきか、芭蕉はどうしたろうか――そこで芭蕉の付句を、自他の点から注意してみると、女性の自の句も次の例のようにあるので安心した事を思い出す。

あの月も恋ゆへにこそ悲しけれ　　翠桃
　露とも消ね胸のいたきに　　芭蕉

「萩おふ」（元禄二年四月）

遊女四五人田舎わたらひ　　曽良
落書に恋しき君が名も有りて　　芭蕉

「馬かりて」（元禄二年秋）

冬至の縁に物おもひます　　土芳
けはへどもよそへども君かへりみず　　芭蕉

「種芋や」（元禄三年春）

ほそき筋より恋つのりつつ　　曲水
物おもふ身にもの喰へとせつかれて　　芭蕉

「木のもとに」（元禄三年春）

隣をかりて車引こむ　　凡兆
うき人を枳殻垣よりくぐらせむ　　芭蕉

「鳶の羽も」（元禄三年十月）

俳諧時雨忌が機縁となって生れた連句会に参加してきた鈴木三余は昭和女子大の先生だった関係から、野村牛耳指導のこの義仲寺連句会には昭和女子大の先生、理事、卒業生達が多数参加されるようになり、別に女性だけの「ローズ連句会」も出来る程発展していった。

さて、その義仲寺連句会のある例会で次のような議論が出た。

「女性が出てくれれば恋句になるなら、私たちにとっては、男性が出てくれれば恋句になりますが、如何でしょう」

昭和女子大では昭和二十七年から連句研究に手をつけ、その記録は大学の近代文化研究所発行の「学苑」に収録されている程盛んだったから、我々の連句会に関係者が多数参加され、このような鋭い質問をされたのであろう。

私はその折、芭蕉の恋句の自他を思いおこし、芭蕉時代は俳諧に女性の参加がごく稀のため、芭蕉は女性の自の句をつくったのかも知れないとふと思った。

「付句の恋の倒錯」という点から蕪村、白雄の俳諧にふれるのも一興だが、それは他日の事としよう。

さて最後に倒錯が可か不可かと問われるならば、可も不可もなしと答える事にしているが、

「一句の主人公は常に〈われ〉でなければならない」

（波　郷）

に出合ってからは、私は不可派に傾いている。

恋句雑感

恋句について

小出　きよみ

批評眼というのは全盲に近く、凡そ理論というものとは無縁の衆生といっていい私が、恋句について書かせていたゞくとすれば、これしかない。根津芦丈先生から直接お聞きした言葉、

「恋は二句目で笑はせる」

勿論これが恋句作法の全てではないけれど、実作して来て、時には、こんな付が一巻に大きな変化をもたらすことをしばしば経験した。背負投げの見事に成功した爽快感とか、くるり一転したしなやかな受身のどんでん返し、こんな感じである。で、我が花野連句会の作品から、芦丈翁に賞めて貰えるかな、と思えそうな例句をすこし挙げてみたい。

14回　姫の小槌に成れる丈夫（ますらを）　絹子
金襴のすり切れるまで添ひとげし　真木子

37回　雪が降るあなたの来ない別荘に　澄
恋患ひに効かぬ金丹　きよみ

44回　赤き襦袢の肩をすべらし　栄子
このごろはあちらこちらに玉三郎　きよみ

57回　口笛の夜毎に田んぼ通ひ来て　久子
男怒鳴られこけつまろびつ　まこと

65回　素足で川を渡りゆく女（ひと）　栄子
駆落の人のカバンを持たされて　久奈

68回　ほのと想へり好もしき君　万津子
スポーツマン実は鬘の禿あたま　まこと

82回　少年の僧の頭を抱きしめて　まこと
不倫不倫とプリン啜らす　きよみ

あわれ・おかし

坂本　孝子

現代的な恋句とは、その舞台を吉原からホテルやディスコに移し、白粉をマニキュアに塗りかえただけでは満足できない。今も昔も恋の情が深いほど人は無防備な姿を露呈し、それをどの様な眼で見、どの様な言葉で一句となすかで哀れにもユーモアにもなるであろう。現代に生きる作者自身がその姿を頭から嘲笑ったり感傷に溺れていてはペーソスのある余情は生まれて来ない。芭蕉の言葉を借りれば「親しく言ひとどむべし」である。又一句の中で哀れ、おかしを詠むより、前句との出合いによる余情にそれが含まれている方が上等であろう。

苦い酒呑めばのむほど苦味増し
　ほんの遊びと思ひながらも
テレクラの番号男女（おとこおんな）別
　冬の館の悪しき建付

右の例は現代の恋の実態ではあろうが転じが弱く、余情の点でもうひと味出し切れていず残念だった。

胸の奥処に棲みつきし鬼
　嬰を負ひて天ぷら揚げる澄まし顔

前句と出合ってこんなに凄い恋句になってしまおうとは……。この余情を分析すれば哀れおかし、恐ろしその他。そして日常的

な句であるところがいい。

京の梵妻鱧値切る月
よりそひて来しその宵のうすき膝
伜の部屋に貼りしマドンナ

浮世の裏側に片足を踏み込んだ中年男の感応に対し付句はやはり男の感応でありながら、青春まっ盛りの伜が、唯アイドルとして壁に貼る健康なマドンナ。これは伜の生活を描くと同時に、父親の恋の哀愁を見事にうかびあがらせていると思う。

幻想の中の真実

市野沢　弘子

女狐の深き恨みを見返りて　蕪村
寝がほにかゝる鬢のふくだみ　几董

前句が「弭たしむのとの浦人」とあるところから、狩人に雄狐を撃ち殺されたのであろう。女狐の深い悲しみと恨みが、見返るまなざしの中に籠っているのが、ぞっとするほどに伝って来て、狩人もその罪の深さに一瞬たじろぐ思いであったことだろう。蕪村には狐を詠んだ句がいくつかあり、又、上田秋成とも親交のあったこと等から、怪異的なものに興味のあったことは、すでに広く知られている通りであろう。しかしこの句は単なる怪異的な句ではなく、怪異を美としてとらえることによって、恋情の哀れさをさらに強調しているのである。そしてその様な技巧的な手法と、当時の文学的傾向を取り入れたところに、一種の新しみを感じると同時に、恋句としての深みを感じるのである。芭蕉の恋句にも素晴しい句が沢山あるけれども、それらの句に現れてくる高貴な女性や下層階級の人達の恋模様とはまた異った、世俗を離れた凄艶の美の世界をそこに見ることが出来るであろう。

蕪村の句に対して几董は、がらっと変った恋多き王朝の貴公子の寝姿を付けて、見返えられた人としている。まさに動と静との見事なコントラストである。そして几董の付け句によって蕪村の感性が、増々冴々としてくるのである。深い信頼に裏打ちされた師弟同志の呼吸の合った、見事な一場面であると思うのである。

（「もゝすもゝ」冬木だちの巻より）

★新刊紹介★

☆小出きよみ著「あさって」

女流連句人の大先達としての小出きよみさんの随筆集、信大連句会、花野連句会のことも載って、興味の尽きない本である。昭和六十二年九月出版。りんどう発行所刊。定価千円。

☆阿部正美著「芭蕉連句抄　第十篇」

この本には――軽みの時代（上）、という副題がついていて、元禄六年までの作品について、精密な考証をしている。昭和六十二年九月。明治書院出版。

☆清水瓢左著「蕉風連句の髄」

巻頭（序の章）には「翁出席の巻に顕れた自他について」を掲載。破・急・緩の各章には「三日月日記和漢行註解」「冬の日管見」「猿蓑の脇三体について」等重要論文十編を収録。作品は百韻六巻、歌仙三十七巻、その他を収め、末尾に著者八八慶暢誹諧之連歌、及び全国より寄せられた賀章を掲載した。都心連句会発行。定価四八〇〇円。

「市中は」の巻　鑑賞（Ⅵ）

東　明雅

5戸障子もむしろがこひの売屋敷　　蕉
6 てんじやうまもりいつか色づく　　来

（秋。人情なし）

（現代語訳）戸障子を蓆でかこった売屋敷は買手のないまま秋になって、天井守り（蕃椒）の実が赤く色づいて来た。

（付心）其場の付け。露伴は「天井守り」という語は「天井よりぶら下げて乾し貯うる故」にこの名があると言い、前句の戸障子に因んで、この語が出て来たのであるという。

（付味）前句のわびしい荒れはてた余情を受けて、そのあたりの景色を以て応じている。この句は全くの叙景の句であるが、前句と詠みあわせると、主は去って家は荒れたままのわびしさであるが、蕃椒は時が来れば、真赤に美しく元気よく色づくよといふ対照的なものの中に観想の意が自らこめられている。「匂ひ」の付けと見てよい。

（転じ）打越の騒々しい気分がすっかり静まって、あわれさが生まれた。

（補説）去来の原句は「天上まほりいろ付にけり」とある。止めの「り」が、打越にさわるので改めたのであろうが、時間の経過が感ぜられ、句に深みが出て大変よくなっている。

天井守は蕃椒の一種で、ことごとく上を向く故にこの名がある。蕃椒は慶長年中、煙草と共に南蛮から将来されたもので、「をだまき」（元禄四年刊）には七月（初秋）の季語として出ている。

6 てんじやうまもりいつか色づく　　来
7こそこそと草鞋を作る月夜ざし　　兆

（秋。人情他）

（現代語訳）月のさしこむ光りの中で、ひっそりと夜なべの草鞋を作っている男がいる。そのそばにはいつか天井まもりも色づいて来た。

（付心）起情の句。前句の天井まもりにふさわしい田舎の小百姓などを思いおこし、はかないあわれさの余韻から、月の光で草鞋を作るようなはかない境遇を付けたもの。

（付味）天井まもりと小百姓は位の付けであろうし、鄙びた秋の物あわれさが両句にただよっている。「うつり」とも「ひびき」ともとれよう。

（転じ）打越は大家の廃屋、付句は小民の陋屋。さらに昼の景から夜にと景色は転じているが、物わびしさ、物あわれさは続いている。

（補説）「月夜さし」という語は珍しいが、山田孝雄氏は万葉集の例について検討され、「月の明るき夜に月光の射すこと」をいうものであるとされた（「俳諧語談」）。月の光りの下で草鞋を作るのは、貧農・老人・仲間などのイメージである。秘註が「いつか」と「こそこそと」はひびきであるという。それは「こそこそと」という俗語的な語感が、「にほひ」や「うつり」とは思われぬためであろうか。

また、この月光の下、草鞋を作っている人は平凡だが実直・勤勉でせい一ぱい生きている庶民を連想させ、「猿蓑」の中の凡兆の描く人間と人生には、これに似た庶民が多くあらわれる。これは凡兆という人の眼による新しい人間像の発見である。

7（ナオ）　こそこそと草鞋を作る月夜さし　　兆

8（ナオ）　蚤をふるひに起し初秋　　蕉

（秋。人情自）

（現代語訳）明るい月の射す庭でわらじをこっそりと作っている男、寝られぬままに起きて来て寝巻の蚤を振ふ女、いずれも初秋の夜の一景である。

（付心）向付。裏の月の句が僧とさる引の向付であったのに、ここでも向付として月を出したのは一寸問題があろう。

（付味）草鞋と蚤は位の付、それらを題材にして、軽い一種のユーモアの気分がある。それは「匂ひ」・「うつり」とも見られぬことはない。

（転じ）打越と前句の間は沈んだわびしい気分であるのに対し、この二句は同じくわびしい気分はありながら、何か一種のユーモアと軽みがあり、変化している。

（補説）この付合の解釈については、いろいろ異説が多いが、我々はやはりまず「三冊子」の意見に耳を傾けるべきであろう。「『こそこそ』といふ詞に、夜の更けて淋しき様を見込み、人一寝するまで夜なべするものと思ひ取りて、妹など寝覚めして起きたる様に、別人を立て、見込む心を二句の間に顕すなり」（「三冊子」赤）と土芳は書いているが、これに対し、向付と見ず、「前句の人の俤」、と見る説もある。即ち、「蚤を振いに起きて、あまりに月が明かるいので、そのまま寝に行かず草鞋を作っている」と解するのであるが、この場合は時間的に見て、付句が前句より先になるから後付と言わねばならぬ。

また、内外の関係から、「蚤をふるひに起（たち）し初秋」と読んで、草鞋を作る人が蚤を振うために立ち上ったさまと解する説もあるが、それでは詩情と、気分の転じの点で不十分ではあるまいか。

この句、打越が天井まもりで初秋、前句は月で三秋だから、付句にはどの秋を付けてもよいのだけれど、初秋だとやはり気分が打越に戻るのは否定できない。はっきり季戻りとは言えないが、好ましくはないのである。

8　蚤をふるひに起し初秋　蕉

9　そのままにころび落たる升落　来

（雑。人情なし）

（現代語訳）初秋のころ、蚤のついた寝巻を振いに起き出たところ、しかけておいた升落しが鼠がかからぬまま、ひとりでにころげ落ちた。

（付心）其場。「類船集」に寝覚―荒れ鼠という付合語があり、前句の寝覚を鼠のあばれる為と見ての付合であろう。この句、原作では「そのままに打こけてある升落」であった。升落は鼠を捕える仕掛けであるが、それに鼠はかからず、そのままはずれて落ちていたさまとなり、前句の「蚤をふるひに」の「ひびき」に応ずることができない。それで「打ちこけてある」を「ころび落ちたる」にかえたのであろうが、そうなれば、けたたましい音を出して、ころげ落ちたと見なければならない。

（付味）「蚤をふるひに」の語勢に応じて、升落が転げ落ちたのだから「ひびき」の付けであり、蚤と升落は位の付けである。

（転じ）わびしい気分は打越にも通うけれども、この句にはおかしみがある。

（補説）蚤にせせられて寝つかれぬ前句に、けたたましく転げ落ちて鼠の取れぬ升落は、ともに何か人をいらいらさせる趣に通うものがある。升落は升を反対にして、つっかい棒で支え、餌を置いて、鼠が入るとつっかい棒が外れて、鼠を伏せて捕える仕掛けである。

9　そのままにころび落たる升落　来

10　ゆがみて蓋のあはぬ半櫃　兆

（雑。人情なし）

（現代語訳）鼠もとれずそのままころび落ちた升落の傍には、ゆがんで蓋の合わなくなった半櫃が置いてある。

（付心）其場の付け。升落を仕かけた納戸などの様子を描いたもの。さらに考えてみると、この一巻には裏十句目のさる引と十一句目の僧、名残の表三句目の刀持と四句目のでっち、同七句目の草鞋をつくる男と八句目の蚤をふるう女というように対付的手法が多い。鼠もとれずころげ落ちた升落と、ゆがんで蓋の合わなくなった半櫃とは、いずれも世に十分役に立たぬものという点で共通しており、その対付的発想によるものとも思われる。

（付味）前句と付句との間に、中途半端で十分役にたたぬところが通いあい、また、その点で升落と半櫃とは位の付けでもあろう。また、その表現が「ころび落ちたる」・「ゆがみて……あはぬ」といういささか激しい気分が通いあうところから「ひびき」の付けと見てよいのではなかろうか。

（転じ）打越・前句・そしてこの付句と、事柄は変化していないけれども、わびしい、貧しい気分は変化していない。

（補説）この句の上句は「ひづみて」であったが、あとで「ゆがみて」にかえられた。「ひづむ」も形がゆがみ、まがって、ねじれる有様であるが、やや言葉が強すぎ、重

いような感じを受けるところから直されたものであろう。

10 ゆがみて蓋のあはぬ半櫃　　兆

11 草庵に暫く居ては打やぶり　　蕉

（雑。人情自）

（現代語訳）ゆがんだ蓋の合わぬ半櫃一つを所帯道具とした草庵暮らしも、暫くいてはまた打ちすてて旅に出るのである。

（付心）起情。前句は、あっても用をなさぬものを象徴したような句で、これこそ、芭蕉が「夏炉冬扇」と観じたものと同じである。そして「打やぶり」というはげしい表現には、食物とか着物とかには執着しない風狂者の姿が感じられる。暁台（一七三二～一七九一）が「前句の貧弱より翁の身の上を思ひやり句をなし玉へり。蓋の合ぬの語より、打破りはひびきなり」と言っているのは至言である。

（付味）右の暁台の説で十分であろう。「ひびき」の付けの見本のような句である。

（転じ）大打越あたりから続いている貧しいわびしい気分が一転して、風狂者らしい趣が出て、丈高い句となった。これも三句の転じの見本のような句で、この句一つで、この一巻がしまって来たと言えよう。

（補説）この作品が出来たころ、芭蕉は例の幻住庵が棲家であった。やがてそこを立去るのであるが、全く自分のことを述べているような格好になっている。「俳諧古集之弁」（寛政四年刊）に「笑ひ笑ひいひ出玉ひけん」と言っているのは、その時の芭蕉の心中を推量してのことであろう。

11 草庵に暫く居ては打やぶり　　蕉

12 いのち嬉しき撰集の沙汰　　来

（雑。人情自）

（現代語訳）草庵に暫くいてはまた打すてて漂泊を続けるうち、都では勅撰集が撰進されるという噂をきき、自分も歌人として生き甲斐があったとうれしく思う。

（付心）其人の付け。また面影の付けである。これは諸書に言われている通り、西行法師の面影付である。「千載集」（文治三年）が撰進された時、当時、高野にいた西行は歌稿を選者の藤原俊成に送った。結局十八首入集したのであるが、これらの事実を前句から連想し、それを一歩進めて、歌稿を携えて草庵を出てゆく歌僧を着想した。「いのち嬉しき」は、「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」（新古今集、西行）からの連想であろう。当時の蕉門の西行に対する傾倒のほどが知られる。

（付味）匂ひ。前句そのものが西行・能因などの境地であったのを、この句で西行、しかも面影付でぴたりと付けたのは、面影付の見本のような出来ばえである。

（転じ）打越のわびしい貧しい情景・気分から一転している。

（補説）この付句がもとは「和歌の奥儀を知らず」と付けたのをこのように直して、面影付の仕方を芭蕉が去来に教えたという有名な挿話が「去来抄」にある。

歌仙

女正月

東明雅捌

女正月小野小町の歌仙図絵　正江
　ふはりと肩を撫づる繭玉　明雅
観潮に船は声あげ渦切って　徒司
　海猫渡り来る島の崖際　杉亭
桂男の張りし大弓おぼろなる　清子
　襷はづして降ろすもも立　和子
名刹の秘仏現に拝みけり　千町
　仁丹飲ませさます悪酔　清和
口説かれたやうな気のする洗ひ髪　和江
　見番ぬきの午後のひととき　清和
相続税親の恩また割引に　和亭
　今年煙草は婆が取入れ　亭町
腰のばし爺の見上ぐる月青く　町同
　米つきばった跳ねる床板　和町
鏡の中その又中に続く我　町亭
　春闘の唄遠くきこゆる
冥想の石人に花降りかかり
　ゆっくりつかるさがらめのお湯

丸の内　新春連句　歌仙画興行

式田和子

成人の日は女正月。丸の内画廊ではまことに風雅な催しを計画されました。歌仙に即興で絵をつけて一巻を巻き上げるというのです。

席は、東明雅先生松席七名。高藤馬山人先生梅席十一名。お世話役の宮下太郎先生竹席十一名。画廊支配人柴原睦夫氏は「画廊界美術界にとって始めての試みで、ゆくゆくは海外でも興行できるようになればという夢を持っている」由、挨拶されました。絵は斉藤吾朗先生。数々の賞をとられた土俗的なユニークな絵を画かれる方です。「いつも画室の中で独りで仕事をしているので、多勢の方がどんな句を出されるか不安ですが、連句の特長である句と句の間の微妙な空間を現わしたい」と抱負をのべられました。俳句、連句も練達の方です。

一時半開始。松席の発句は、

女正月小野小町の歌仙図絵　正江

会場には画廊所蔵の歌仙図絵が飾られておりまして、格調高く優雅な挨拶の句。明雅先生が新春らしくふうわりと脇。第三はがらりと転じこの歌仙の展開を示唆する勢で徒司さん。月の座では、力強く大弓をひいて女正月の月の字を避けられた清子さんお見事。そこで黒の無紋無地に藍の濃淡縞の袴、肌色の襷十字にあやなした吾朗先生の奮戦中

遠足（ナオ）の子らのお握りほかほか亭　江
龍を鳴かする二荒権現　和
山出でし狸浮かれて囃したて　司
低迷相場買ひは静観　清
ディオゲネスきどり乞食ダンボール　町
送り迎へを引きうくるヒモ　和
このままで帰っていいのよいくぢなし　清
涙一粒落す畳に　和
閨秀の書家ふんばって筆のさき　江
てさぐりでうつ古稀のワープロ　司
人生の余白にありし夜半の月　江
先祖代々鹿の角切る　和
留守（ナウ）勝ちの荘をあづかるいぼむしり　司
過疎の村縫ひ清冽な川　町
自転車にカステラのせてお見舞へ　江
手帳に記す七・七の文字　司
三百年前の翁の花の道　雅
茶摘の笠の右に左に　亭

昭和六十三年一月十五日
於　丸の内画廊

の御姿を属目の句で和子がつけて「男振り」を残させて戴きました。

いったいどんな風に句と絵がついて行くのかと申しますと、一句つきますと伝令役を勤めて下さった正江さんがハイハイと書記の処へ運ばれます。書記役は、男性岩井正伸先生。女性山田京先生。松席は山田先生で、紫の小紋をゆったりと召され、お髪は小倉遊亀風。ピンク幅広の襷で、

閨秀の書家ふんばって筆のさき　正江

雄渾ながら人間の息の匂ふような筆です。その大短冊を壁に並べて貼り、まわりの見学の方々にも連句の連想的な面白さを理解して戴こうという趣向です。ご見学の衆はそれを見ながら侃侃諤諤。訳知りの徒司さんがあちらこちらと出張して、これはこうしてこうなって……張り扇の欲しいところでした。

絵は席により屏風と画板。歌仙をわかち書きし、空間に絵が入ります。小町は雲に乗り、月あり狸ありばったあり。圧巻はお爺さんの春闘で持った赤旗には〝もっと生きたい〟と書かれ、爺婆を好んで画かれる吾朗先生が行間の想いを読みとられ結集された「志」でもありましょう。明雅先生が連句の本道を花に托され、絵は天に虹と万朶の桜。地には茶畑。門下連衆が右になり左になりしながらもついて行くという心入れの挙句でめでたく首尾。

五時、各席終って連衆の紹介。披講（松席下鉢清子）、吾朗先生の恩師瀬木慎一先生からご挨拶を戴いて後一同会食。暖かな宵、いささかのほてりを残して散会いたしました。

蓑虫

付勝練習二十韻

東　明雅

切	締	句	投
20日	月	4	

立句　蓑虫の音を聞に来よ艸の庵　芭蕉
脇　初めて涼し掛けし濡縁　正雄

第三

治定

1　海岸線波頭真白に月ありて　千町
2　月仰ぐレプリカの如母子似て　遊
3　鮭小屋の月仰ぐなり遠く来て　道郎
4　後の月繋ぎし馬の立寝して　鋭太郎
5　月天心繁華の町を足早に　哲
6　満月にパソコンゲーム続くらん　井田千雪
7　月賞づる遠近児等も混じりゐて　淳子
8　リニアカー満月の下ひたむきに　上月雅代
9　目上ぐれば初月ほのか稿なりて　淳子
10　見渡せば端正の月江南に　よしえ
11　竿畳む水に月光滑らせて　吐紫
12　月の暈飛行機ひとつ赤き灯に　麻子
13　鉄塔にかかる望月夜は更けて　治子
14　障子洗ふ手元に淡き月さして　智子
15　名月の丘をめぐれば池見えて　啓世
　　望の月横切るは飛機の尾灯にて　正雄

※それらと異なって、しかも次に展開する要素をもった形として採用されているのである。

(1)第三のいわゆる第三体（第三の句としてふさわしい内容とその形）をつくるために、大山、小山、杉形の三つの形が説かれている。

（大山体）秋の風鍛冶がこだまの通ひ来て

鍛冶がこだまの通ひ来て、と、下七五を据えて、上五秋の風と別の事柄をおく。

（小山体）みの作りみの作りさす雨止みて

下五別のことを据える。

（杉形）むら雀日和定まる声立て

中七別のことを挿入する。

以上が、第三を作る要領である。各自、自分の作品をふり返って、どうであるかを反省して見られるのも、連句上達の一方法であろう。

治定の句は立句・脇の境地より一転して、海濱の大景を出した点変化があってよい。この月は三秋で立句も三秋であるが、この位は勘弁して貰いたいところ、もちろん人情なしの句である。1はおもしろいが、序・破・急の序の段階ではいささかおもしろすぎないか。2は艸の庵と鮭小屋が居所の打越である。3はおもしろい所を捕えているが、後の月ではいささか前句と付味が悪くなる。4はやや気分が立句に通じ戻るところがあろう。5はおもしろい。パソコンに賑かに興じている点立句から一転している。その点は6にも通うものがあるが、6は「遠近児等」というのが

16　銀沙灘三五夜中を照り映えて　澄子
17　新豆腐真白き皿に月射して　美鈴
18　居待月岬の上に昇りきて　杉亭
19　居待月故郷への文書き終へて　妙子
20　新月は思ひ出のよき軍歌にて　義人
21　一閃の鞭を愛馬に月浴びて　隆秀
22　撥釣瓶月の光りをこぼしつつ　美幸
23　月見船汐ゆたゆたと差しくらん　元子
24　月の下廻転木馬は静まりて　安子
25　望の月嬰の靴すこし大きくて　正江
26　水平線月の光のただよひて　みづゑ

第三はその文字の示す通り、発句、脇に次ぐ第三番目の句である。脇が発句にぴったりと付いているのに対して、第三は変化の始まりと言われ、発句と脇の境地から、思い切って離れることが大切である。

次に、第三は特に丈高く品位のある句であることが要求される。それだけに、その形までも他の句とは異ったものが定められている。それを要約すれば、

(イ)第三は胴切れを嫌う。胴切とは、一句の意味上の切れ目が、五・七・五の句形と一致せず、いわゆる句割れ、句跨りの現象を呈するものである。

(ロ)第三の止まりは、に止め、にて止め、らん止め、もなし止めなどが普通である。これは、発句はけりとかかなとかで切れる形が多く、脇は体言で止めるのが多いので、※いかにも曲がない。7は大分苦労して、立句・脇句の余りにも閑寂な境地を何とか賑かな華やかな、形のはっきりしたものをもち出して変化を付けようという苦心のあとが見える。第三だからこの位前句から離れてもよいかも知れない。8は気分がいささか前句に近い。9は堂々とした第三体だが、江南が地名になりはしないか。10は「竿畳む」が分からない。11と15は非常に似た句である。飛行機を飛機とつめていうのは止むを得ないことかも知れないが好ましいことではない。12は立句から変化していない。13も同様である。14は何とか転じようという意志はよく分かるが、「池見えて」が唐突である。16銀沙灘は普通名詞か個有名詞か、私は銀閣寺のしか知らないが外にもあるだろうか。あるとすればおもしろく、よい句である。17はおもしろいが気分としてはやはり立句・脇の境地であろう。18は治定の句とよく似て甲乙つけがたかったが、動きのある点で治定の句が勝っている。19故郷への文は述懐気味にならないか。20は軍歌がひっかかる。21もやや軍体で、何れも軽いからさしたるキズではないが、他に好句があれば仕方がない。22はやはり立句・脇の境地に近く、23は何か変化を付けようとされたところは7と同様である。しかし二つとも果して成功したかどうか。24はちょっと変化している。25は十分変化があり、おもしろく功者な作り方である。26は18とともに治定の句に近く、ともに流石老巧の句である。

次は四句目。雑の短句、人情ならば他、人情なしの句でもよい。

第二十四回　猫　蓑　会　二十韻　六巻　参加者　三十五名

昭和六十三年一月二十日
於　関口松声閣

うそ替へて　小川弥生　捌

うそ替へてゆらりと長き影ぼふし　弥生
遠く聞ゆる獅子舞の笛　みづゑ
点心に竹の割り箸副へられて　明雅
厨にたぎるやかん大鍋　淑子
テナントを募集と書きて月を待ち　美恵
彼との仲も夜寒朝寒　英子
文化祭のこる未練の赤電話　淑
だれか仔犬をもらって下さい　恵
還暦を過ぎてもいまだブリッコよ　ゑ
舗道絵タイルぬらす夕立　淑
船乗りの焼酎やけの胸厚く　ゑ
命限りと千年の恋　英
読み耽る源氏の君の物語　恵
変化窺ふ夜は怪しき　雅
炉の端へ月の明かりにつどひ合ひ　英
ララバイ上手く歌ふ少年　ゑ
フィレンツェの歴史秘めたる大聖堂　恵
春愁の髪風になびかせ　淑
躁と鬱こもごも来たる花の頃　雅
野山の色へ紛れ行く蝶　英

初懐紙　井手欅晴　捌

集ひ合ふ眉暢びやかに初懐紙　欅晴
鳥總松立ち浄き箒目　あかり
ジョギングの赤いトレパン一列に　麻子
隠し莨のけむりふうはり　一恵
飼猫も野良も見上げる小望月　隆秀
菊の酒とて無理に勧める　正江
ほだされてつい味な気に虫の宿　徒司
同じところにありし黒子よ　江
シニアとは学生料金映画館　子
夏大根のかたくひがらく　り
姑は病勝ちなり刺短か　恵
文化講座を覗く折々　秀
落城に愛染明王預けたる　江
小谷のわたり雪の逢引　子
フェアリめき妖しく光るアンタレス　司
蝙蝠瓦斯燈嫦娥格子戸　子
なつかしい味噌煎餅を駅で買ひ　恵
本当かしらけふ萬愚節　秀
散り込める花を浮かべて迅き川　り
叙勲の便り運ぶ春風　江

初景色　坂本孝子　捌

雪吊の先かがやかに初景色　孝子
春着をうつす池のさざ波　利子
ミルク飲むみどり嬰の夢たのしげに　天留子
伝言たのむ丸文字のメモ　良子
帰るさの畠にのぼる盆の月　杉亭
はんこたんなの瞳冷やか　利
菊枕つくりてよこす女弟子　良
矢倉深きに鎌倉の墓　天
泡盛を含めばかすか胃が疼き　孝
パフォーマンスの巡査大うけ　良
宰相は言語明瞭意味不明　亭
姿そのまま炭団燃え尽き　良
貧しさも互ひの肌でぬくめ合ひ　利
奈落の底は恋の極楽　同
割きどぜうつるりと逃げて月の下　良
扇で招く寄席の呼込み　天
あの街も往時茫々黒流行り　亭
旅の終りにひたる雁風呂　利
父母の杖つき出づる里の花　天
仔猫やさしくもらはれてゆく　亭

句座囲む　副島久美子　捌

新年を寿ぎ合ひて囲む句座　久美子
切山椒の盛れる塗皿　遊
踏石を濡らす雨音ひそやかに　雅代
テレビドラマに溜息をつき　美保
若き妻いくつもむきて青蜜柑　淳子
行水名残の胸のぬくもり　哲
毒茸に深夜の月光降りそそぎ　保
使ひにゆけと追ひ出されし子　淳
ごきぶりを癇癪持ちの一叩き　遊
またも呆れる汚職政治家　哲
六本木裏に氷川の古き杜　同
ボルボネーゼのバッグ小脇に　遊
脱ぎ捨てしミンクのコート下に敷き　代
凍える月も溶かす抱擁　哲
くろと呼ぶ野良犬軒に餌を拾ひ　淳
駅前屋台細腕繁昌　遊
呆け母の腰に結べる迷子札　淳
ゴム風船の枝にかかりて　代
ゆっくりと城山リフト花吹雪く　同
水平線に蜃気楼見ゆ　保

冬ぬくし　八角澄子　捌

冬ぬくし朱き実拾ふ庭の石　澄子
ふくら雀の枝に二三羽　千町
略点前おもたせの菓子和やかに　元子
小さきレディよそゆきの顔　彬風
羊腸の峡に澄みたる月仰ぎ　清子
夜長の湖へ君と漕ぎ出づ　啓世
初体験新酒の酔に勢ひ立ち　清
渡る世間は鬼がいっぱい　町
鎌倉の谷戸深くして古刹寂び　元
万歩ついでに老の買物　清
病葉をリルケ読む間の栞とす　町
自堕落に寝る月の涼しき　風
次々に空飛ぶ旅の誘ひ来て　世
共に煙草に秘めし毒薬　風
嬉しいのいいのかうして死ねるなら　元
金婚式に洩らすお惚気　風
カタロニヤ楽士のチェロの嫋々と　世
マリアの像に蝶のまつはる　町
歩を止めて我も憩はむ花の雪　澄
春宵たのし遠き夕星　元

初懐紙　若尾よしえ　捌

俳諧の縁うれしき初懐紙　よしえ
淑気ただよふ庭園の池　正雄
子供等の石蹴りの声聞こえきて　好敏
何度やってもあはぬ計算　和子
ふつふつとたぎる紅茶を月の卓　達子
盆に帰るといったあのひと　和子
そぞろ寒ぐっと引寄す肩ふるへ　雄
円高メリット受けぬ大衆　敏
ビル街の裏にみみずが8の字に　達
千夜一夜の盗賊の市　敏
蝦夷の酒廻しのみしてなつかしき　雄
厨匂ひて急ぐ法華経　和
密会の宿に夕日がかっとさし　敏
ジャンとすりばん待ってよと月　和
枯葉道歩みつづける身のほてり　雄
鎖をひけばどっと出る水　達
罪もなく犬はひねもすつながれむ　敏
おぼろの窓にもれるめりやす　達
杣人はたばこ吸ふ時花見上げ　え
鰊網曳きや鴉よりくる　雄

沙羅の会

脇起り百韻二巻

葱白く

昭和六十二年十一月十八日
於　京橋区民館

氏原正雄捌

葱白く洗ひたてたる寒さ哉　翁
　忰かみし手に吹きかくる息　正雄
屋敷町配達少年かけ行きて　杉亭
　一寸ためらひ鳴いてみる犬　麻子
新刊の本は積んどく許りなり　和子
　パッチワークの布を選べる　貞子
昇りそめ湖まだ昏し今日の月　雄
　尾越の鴨の岩に群れつつ　亭
青蜜柑笊(ウ)に盛り上げ売子立ち　麻
　マニキュアの色娘見せ合ふ　和
蠍座の女の性の悲しさに　貞
　地獄もよけれこの方となら　雄

二(ウ)鬼胡桃椎の実橡の実銀杏の実　亭
　旅芸人の一人づつ脱け　麻
地面師のからくりごとに浮かぬ顔　久
　ダーツボードにピシと金の矢　和
エスニック料理はいつも大辛に　貞
　なれしつもりがつらき独り寝　雄
札ちょんも博ちょんもあり月冴ゆる　亭
　深情なる年増芸者と　麻
大急ぎシーツで隠す素ッ裸　久
　おぷう出ましたほっと民草　和
株暴落こんな積りでなかったに　貞
　削る鉛筆つぎつぎに折れ　雄
花の下剣舞の刃さき風を切り　亭

日盛りの職安の坂のぼりつめ　雄
　路地の裏には泥んこの子等　亭
せはしげに蜂の巣作り古き軒　麻
　あけぼのの空かすむ三ケ月　久
ぼんぼりに花見囃の席をきめ　和
　志野の小皿にのせる草餅　貞
メーデー(ナオ)を済まして急ぐ絵画展　雄
　鳩の胸毛のころころと舞ひ　亭
鳴き龍の高幡不動新しく　麻
　帰りの土産植木ぶらさげ　久
ヘビメタの男しけこむ四畳半　和
　ゆふべ抱きしは雪女郎かも　貞

腎虚して三年余りを臥せるひと　亭
あごで指図をされるにようばう　麻
さらさらと小川のひびく甲斐の里 久美子
大山椒魚月に動かず　和
灯のゆらぐ夜店にて買ふブロマイド　貞
レーガンさんも影のうすれて　雄
青瓦台目指す一盧と三金と　亭
動物園に獏は眠れる　麻
花吹雪人もベンチもみな埋め　久
世を逃れても春は楽しき　和

二オ

古新聞ずしりと重き大掃除　貞
うらうらと晴れ波のひびける　雄
幼ならの拾へる貝はあこや貝　亭
形見に貰ふ硯端渓　麻
血圧の気になり色にも気をつかひ　久
五分づつ詰めて縫ふ縞袷　和
テーブルの下でつねるが合図にて　貞
たはむれ何時か本物となる　雄
四十路われ人目を忍ぶ昼さがり　亭
三原山頂火映くれなゐ　麻
穂芒の靡ける中を馬のゆく　久
ロザリオベールかぶる深々　和
残月に仰ぐベニスの塔ほそき　貞
友と杯上ぐ岡の爽やか　雄

口ばっくりと焼けし蛤　麻

三オ

網を干す漁夫と語らふ春の浜　麻
遍路の鈴の遠く去りゆき　久
おまはりはシートベルトをつけよてふ　和
サングラスかけミニのスカート　貞
すぐ好きになっては相手かへる癖　雄
嫌ひな男ばかりしつこく　亭
冬障子閉して昼の爪弾きを　麻
黄の鮮やかに石蕗の花　久
舌鮃ひらたきままに跳る皿　和
又も追ひやるお隣りの猫　貞
なかなかに電子ロックの開けられず　雄
したり顔して言多きひと　亭
十三夜香きく会に集ひきて　麻
残る虫の音庭のすみから　久

三ウ

メンソレを脛にぬり込む運動会　和
お脳の隙をさぐるCT　貞
中年は事務機械化に疲れはて　雄
インテリゼンスビルの林立　亭
恰好いいただそれだけにちょっと惚れ　麻
肩をすりよせ深夜高速　久
身籠った訳も言へずに中学生　和
置き去りにした夏の思ひ出　貞

柊と鰯の頭並べ挿し　雄
お灸のあとのしるき首筋　亭
ドラフトの結果如何にとテレビつけ　麻
江川振りにはあきれたるまま　久
秋収めやっとすませし老二人　和
どぶろく醸す村のお祭　貞
弓張月雲にのりたる如くにて　雄
新絹たちて姉のブラウス　亭

ナウ

紅葉狩り疲れしころの古都の茶屋　麻
菓子名人の作る練切　久
明雅師の叙勲目出度くことほがん　和
何はともあれ祝電を打ち　貞
玄関も磨かれ靴も揃へられ　雄
雲雀東風吹く瀬戸の山山　亭
振り返る花の霞の濃く淡く　麻
ゆっくり動く畦塗の鍬　久

連衆　杉江杉亭
内田麻子
式田和子
米谷貞子
副島久美子

葱白く洗ひたてたる寒さ哉　翁
頬杖つきてそぞろ冬の日　彬風
なく鯨愛しく高き声上げて　千町
鎖をとかれ放たれし犬　淳子
塾帰り鴨居をくぐる孫の丈　啓世
取分けてゐる手づくりの麺麭　みづゑ
振り向けばいつしか月の出でてをり　遊
時を忘れて虫の音を聞く　弘子

新走り久しき友と盃かさね　風
文房秘筐飾られし棚　町
メモ一枚先きに行くよと書き残し　淳
そそくさリング指に嵌めつつ　世
寄り添へば男臭さの厚き胸　ゑ
梵妻けふは濃化粧して　遊
懶げな窓辺の三毛の夕涼み　弘
兎小屋にもベランダの月　風
愛煙家段々肩身がせまくなり　町
相続税など我は関せず　淳
春一番巨きな船のマストにも　世
笑ひ初めたる六甲の山　ゑ
花厨貝のつぶやき聞きとめぬ　遊

馬場彬風捌

二

傍目にも睦まじ夫婦ひっそりと　風
玉の枕の揺れて鳴る音　町
抱かれて夜明けはいやと泣く女　淳
鶴屋南北四谷怪談　世
リュウマチの胡座すててこよれよれに　ゑ
名物団子餡は三色　遊
柿の木にかかる満月縁の影　弘
水澄む川に棹をさす舟　風
冬仕度おくれしままに外出がち　町
烏瓜の実の真赤なる嘘　淳
近頃のカメラやたらに音を立て　世
シャッターおろし閉店とする　遊
花吹雪絵馬堂絵馬の吐息充ち　ゑ
畦塗り終へて休む農夫ら　弘

三

寄合ひの眠気もよほす陽のうららら　風
種痘の痕を見せ合って居り　町
外風呂に唄ふ声する石畳　淳
火の鬼棲むか伊豆の大島　世
盗品と知らず買ひたるコローの絵　ゑ
ヒャリゾット氏ヒャリハット氏　遊
妻帰宅靴ぶら下げて屋上へ　弘

ながめゐる雨もやみたり後の月　淳
鈴虫を鳴く江戸家猫八　町
三等身ビヤ樽風の秋袷　世
人よきのみの母の思ひ出　ゑ
花守となりて眠りぬ花の下　弘
長閑な空に飛行船浮く　遊

化粧せる自由の女神風光る　風
ヨコメシタテメシ商社マン達　町
幼き日箒またぎて叱られし　淳
大山天狗は伯耆坊とか　世
藻を被き潜水服であがり来る　ゑ
明眸皓歯端正な挙措　遊
次々に見合ばなしを断りて　弘
助手で十年嫁ももらへず　風
狂ほしき修羅の苛なみ犯す罪　町
破れ芭蕉の裂けに裂けたる　淳
宵闇の心に点るもの持ちて　世
芋銭の絵あり忘れ扇に　ゑ
駅前の証券会社荒稼ぎ　遊
円高さはぎ続く今月　弘

童にかへり石鹸玉吹く　弘

二オ

グラフィックパソコン彩も鮮やかに　風
麻雀やめて玉突に凝る　町
淡々と記者会見の江川君　淳
雪起し鳴る旅先の宿　世
冬薔薇ワインはロゼが好きなのよ　ゑ
DCブランド粋に着こなし　遊
成金の村一番の色男　弘
背戸の藪にて偷まれし唇　風
御神籤に叶はざる夢叶ふ夢　町
作務衣の僧の立ち居振舞ひ　淳
タクリマカン彼方にパミール越え聳ゆ　世
地平にでっかい血の色の月　ゑ
雁がねの鉤を仰げば心和ぎ　遊
ゐのこづち付け嫂の戻りし　弘

狸寝入りの蒲団被れる　風
冴え渡る月遊行寺の一つ火に　町
風ならしゆく町角のびら　淳
クラス会古稀ともなれば惚けのこと　世
パイプを磨くてかてかの袖　ゑ
教へてよ危ない橋の渡り方　遊
西を向いたり東向いたり　弘

三ウ

外交の手並は如何新首相　風
飲むとなほさら猿に似てくる　町
ブティックで云はれるままに払ふ金　淳
クンパルシータ踊る春の夜　世
胎動のお腹おさへて酸い葉かむ　ゑ
卒業の娘の袴胸高　遊
誰もゐぬ新宿御苑陽炎へり　弘
池に歴史を映す建物　風

北風に吹かれ街ゆく背をまるめ　風
雪降り初めぬ鍋になどせむ　町
縫ひぐるみ並べ楽しむ子なき家　淳
美容師今日もペット自慢し　世
こまごまと自分史そっと書きつづけ　ゑ
春の灯洩るる高楼の窓　遊
夕星のきらめく遠き花の山　風
若駒を追ふ里の人々　弘

連衆　原田千町　上月淳子　中島啓世　山口みづゑ　雑賀遊　市野沢弘子

武翁賞作品募集

作品は歌仙または二十韻だが、そのやり方は自由、
九月十日（土）までに呈出されたい。
応募作品は「武翁賞応募」と朱書すること。

波郷先生の連句に思う

下鉢清子

風花や氏素姓なき庭ながら　石塚　友二
一羽はさむき雀こぼるる　石田　波郷
このあたり村の境と杭打ちて　飯野　砂不
白膠木が染めし水の紅　田中午次郎
大いなる月をかかげし藪の上　大内　葭生
焼松茸のにがき後味　苅谷　敬一

石塚友二の句を発句に脇起りとしたこの表六句は、昭和十八年三月十四日に向島の料亭雲水でもたれた風切会の、『猿蓑』研究会の席での作品である。

私は、波郷の連句について、近頃外川飼虎氏が上梓された『わが波郷の周辺』中の、「波郷歌仙のこと」に依って詳しく知り得たのであるが、この部分の数ページのお蔭で、波郷の新たな世界に踏み入ることができた。読み進むに従って若き波郷の俳句に賭けた一途さや心映え、研究を古典に置いて『鶴』俳句の特長を育てていった見識に、今更ながらに敬服しつつ、改めてその時代に溯って資料を読み直してみたが、魅力ある波郷俳句を育てた原因の一つに、連句のあったことを紹介したい思いにペンを取ってみた。

昭和十七年五月に『馬酔木』最後の編集を終えてそこを離脱した波郷は、定職も無く、もう一歩も後へは退けない思いで俳句に打ち込み、『鶴』誌の運営に心を傾けた。この前後の句を纏めて句集『風切』を昭和十八年二月に上梓しているが、この頃が波郷俳句の方向の確立したときではないだろうか。風切時代と称された時代で、俳句の散文化を憂い、俳句は散文に非ずして実に韻文であることを説き、屢々誌上に考えを発表している。抜粋してみると、

わが俳句では、表現の格、作句の格といふものは絶対に厳重でなければならない。……中略……実作の格としても、や、かな、けりの切字を用ひよ。解らなければ解らないまゝでいゝ。重厚なこれらの切字を用ひよ。（鶴・S・17・11月号）

俳句は今日のやうな時代にはひたすらその格調を正すべきで、素材だけの便乗は奉公の根本精神を喪ふ。

（句集風切後記）

波郷は俳句に於ける韻文精神を説き「古典に還れ」の主張から『猿蓑』研究の集いを持ったが、冒頭の表六句はこうした古典勉強の所産である。明治以来俳句と切り離されて、俗の名のもとに衰退を辿った連句であるから、式目も割合緩やかに見うけられる。集まった面々の独学研究の持ち寄り、甲論乙駁試行錯誤のあったことも想像できるが、波郷が宰配したと言われるこの表六句は、残念ながらこの先は続けられなかったようだ。この日、付句を醸すまでの時間がたっぷりと費されて、裏へ進むまでには至らなかっ

たのか。だが、脇句の性格、第三の転じと、て止め、冬・冬・雑・秋・秋月・秋と、式目を守っての進み方に、一座の研究成果と約束事を追求し得た連衆の満足を読みとることが出来る。要するに波郷の連句は『鶴』の旗印「俳句は生活の裡満目季節をのぞみ蕭々亦朗々たる打座即刻のうた也。」の朗々たる韻文精神徹底の為の「古典と競い立つ」ところの『猿蓑』研究であり、目標はその発句の格を学ぶ以外の何物でも無く、それ以上は踏み込もうとはしていないのである。その考えの明確な文が『鶴』の昭和十八年二月号に書かれた「発句に就て」という文である。

発句に就てと言っても今茲で連句のことを述べやうとするのではない。小生度々言ひ書きして倦まざる俳句の伝統韻文徹底の為、発句といふ言葉を考へて見ようと思ふのである。発句は勿論連句の巻頭の句であるが、一巻を統べるものだから「丈高く大将の位があるやう」作らねばならぬとされてゐる。発句といふ名前が何故俳句となったかなどは省略しても俳句も丈高き大将の位あるやうに作らねばならぬといふことを、改めて言いたいのである。われわれは発句を作ればいいのである。俳句に正しい俳諧精神を失わしめない為にのみ「発句」をやろうとするのである。厳しい俳句精神に徹し「我発句を生さんの心構をもつならば、緊った響の十七文字は成る。(抜粋)

昨年末、戸川飼虎様よりお電話を頂いた。「波郷歌仙のこと」と、波郷と戸川様の唯一の両吟について、厚かましさを顧みない私の手紙についてのご返事であった。

波郷は、散文化して来た俳句について、俳句と平句の違を知るために、また韻文を正し用言を減らすために連句を勉強した。これは俳句の格を上げる為のものである。また、発句だけを見るのみでは古人の開いた風雅の世界の全貌を知ることは不可能であって、どうしても連句まで行く必要があった。連句実作は俳句表現の弊風是正である。木乃伊取りが木乃伊になってしまってはいけない。近頃は連句もブームであり僕も参加することもあるが、どうも良い作品は無い。古俳諧を越えられないのではないだろうか。中世で完成された様式美を伝統として受け継いでいる能楽の世界で、新作能が育っていないと同じことが連句の世界でも言えるのではないだろうか。

お電話の内容を要約すると以上のようなやりとりである。手紙を書くだけの時間が無いから電話でと言われつつ、年末の業務ご多忙の中をわざわざおかけ下さった上に『泉』誌に書かれた両吟の成る過程の原稿をコピーしてお送り下さった。日の目を見ることになった波郷捌の表六句を発端として、その周辺の資料を読み直したとき、波郷の連句に対する姿勢も見事であり、飼虎様のお言葉もまた然りと思われる。しかし、現代人の教養の上に、現代の言葉を練り上げて、潤いのある連句が出現しないとは言えないのではないだろうか。何世紀か過ぎ去ったとき、今の時代が古典と言われる世になったときに、一巻でも良い、鑑賞の俎上に載るものが残されないとは言い切れない。そのような夢も持ちたいのである。

四宮連句会

歌仙　勤労感謝の日

東　明雅　捌

勤労をたゆまず古稀や感謝の日　明雅
　床に飾りし松と万両　和子
奥山に青天の瀧凍つるらむ　請子
　残月淡く猿聞く人　孝子
自家製の父の葡萄酒ふつふつと　達子
　つけて貰ひし赤い羽根なり　隆秀
六(ウ)本木雑沓の中身をかはし　杉亭
　パフォーマンスは芋洗坂　好敏
机には見合写真を積み上げて　孝
　先生そんなおそろしいこと　達
狂乱の怒涛うち寄せまた怒涛　秀
　蝙蝠色に暮れて行く空　和
寝ころびて月仰ぎをり箪　請
　大織冠は玉枕して　和
中国の孤児のよるべも絶え絶えに　孝
　千代(ちだい)川に流す紙雛　亭
箏爪は指にきっかり花明り　孝
　縁に並びてしゃぼん玉吹く　和

山鳩(ナオ)のほうほうと鳴く造成地　請
　16ビートはカーラジオから　孝
橡落葉名画泥棒大股に　請
　たっぷり芥子つけておでんを　秀
塒から女になって出勤し　和
　パイプカットの天誅を受け　亭
ハイレグは見せるばかりで濡れもせず　孝
　平家納経紺紙銀泥　請
息ひそめ邯鄲を聞く御師の家　亭
　自然薯をする婆の衿かけ　和
ぽっかりと岬の上の十三夜　亭
　シャンソンうたふ旅のつれづれ　孝
そのかみの映画なつかしジャン・マレエ(ナク)　請
　肩湿らせてこまやかな雨　孝
一株も持たざる者はのほほんと　亭
　ぷつりぷつりと田螺泡ふく　和
夢の中うすずみに咲く花の色　雅
　ボートレースのあがる歓声　敏

昭和六十二年十一月二十三日
於　井草四宮集会所

両吟　二十韻

山に山

原　裕
中島啓世

山に山影し響けり師走風　裕
　寒鴉飛ぶ谷あひの道　啓世
銀の匙磨くもたのし客待ちて　同
　賑ひの膳すでにととのふ　裕
月代を映して軒の盥水　同
　虫すだく中低き靴音　世
蔦もみぢくぐり戸ずらし忍び会ひ　世
　瓶よりそそぐ烏龍の味　同
雲切れて火の島煙盛んなり　同
　童話書きつつくる贋金　裕
冷汗で馴れぬ上布のまとひつき　同
　ドア閉めてより胸の苦しく　世
仏前に二人の仲の許し乞ひ　世
　鰭酒をつぐ熱き眼差し　同
小夜更けて月冴ゆるなり鳴の海　同
　猫捨てにゆくかげの重さよ　裕
終着駅網棚に置く漫画本　同
　ちらほら聞こゆ栄転の沙汰　同
奈半利川つらゆき愛でし花の舞ふ　同
　初虹かかる街騒の上　世
昭和六十二年二月起　十二月満尾　同

啓　世

昭和四十七年、茨城大学の山本正秀先生の御紹介で、日本文学風土学会に入会させていただきました。当時会長は久松潜一先生で、副会長が埼玉大学の長谷章久先生でございました。先生は私が山口誓子門下で俳句を少しばかり致しておりますのを御存じでしたので、ある時特別に「この人が鹿火屋の主宰の原裕さんだ」と御紹介下さいました。原様は埼玉大学では、長谷先生のもとで、国文学を御専攻なさいましたので、ことにお親しい御様子でした。

学会で夏冬一回づつの現地踏査の旅に御一緒いたします間に、「良寛の海に降り立つ素足かな」に私が「銀杯草にこもる潮騒」と脇を付けましてから、歌仙を一巻まき終えました。その後も旅の記念に現地で立句をいただき、二巻ほど二十韻を巻きましたが、普通はわずか三時間ほどで出来ますものを十ケ月もかかりましたのは、原様が一分刻みのお忙しさのためで、ゆっくりお会いする折がなく旅行中も飛行機やバスの中で比較的近い席で短冊のやりとりをする位で、他の場所ではなるべく、御句作のお邪まをしないようにと思っております。これからもゆっくりながら続けてまいりたいと楽しみにいたしております。

アメリカ便り

竹本義人

新年明けましてお目出とうございます。

久しく御無沙汰致しておりますが、先生も奥様もお元気のことと存じます。いつも「連句」をお送り下さり有難うございます。勉強させて貰っております。

ところで今日は一つの提案が有りまして、お手紙致しました。

提案と申しますのは、先生が創始なされました俳諧連句「二十韻」ですが、それを「双十」（そうじゅう）と名付けられては如何ですかと建議致したいのです。中国では「二十」の事を、祝意を込めて「双十」と言いますし、御存知の事と思いますが、中華民国の辛亥革命記念日でもあり、現在は建国記念日として毎年祝賀されている十月十日を双十節と名付けています。それで、「歌仙」が三十六歌仙からとられた様に、「二十韻」を「双十節」から取って「双十」（そうじゅう）と名付けられたら、如何かと思っております。俳句・俳諧が現在、中国に及びつつあることを考えますれば、又意義あることかとも思います。

私の発案、そして加藤耕子さんの賛同で、秋元正江さんを加えまして三人で、「文韻」を始めることにしました。それを「二十韻」でと思っておりますので、この際名前を…と思いついた次第であります。お取り上げ願えたら有難いと思います。乱筆ながら…奥様によろしく。

一九八七年大晦日

義人

東　明雅先生

★新刊紹介★

☆雲英末雄著「芭蕉連句古注集　猿蓑篇」

「猿蓑」は七部集の一つで、傑作の誉高いものである。それだけに江戸時代から多くの註釈書があり、それは、現在も芭蕉研究の重要な手掛りとなるものである。今回、雲英氏の努力によって我々は希観の古注二十種を、すべてこの一書にたやすく見る事が出来るようになった。芭蕉研究家および連句実作者に取って最大の福音である。汲古書院発行。定価三二〇〇円。

東　明雅著

夏の日	角川書店（絶版）	価	700円
連句入門	中公新書	価	540円
芭蕉の恋句	岩波新書	価	320円
猫蓑	永田書房	価	2300円
連句辞典（杉内徒司・大畑健治共著）	東京堂出版	価	3500円

連句会案内

◎連句教室

日　時　第一日曜日　午後一時～五時

会　場　関口芭蕉庵

文京区関口二ノ一一ノ三

（電）九四一ー一一四五

◎柏連句会

日　時　第三日曜日　午後一時～五時

会　場　光ケ丘近隣センター

（南柏駅よりバス　光ケ丘団地マーケット下車）

◎A・C・C連句・理論と実作

日　時　第二・四水曜

午後一時～三時

会　場　新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャーセンター

（電）三四四ー一九四一（代表）

◎猫蓑会（会員制）年四回

（一月・四月・七月・十月　第三水曜日）

会　場　松声閣

文京区新江戸川公園内

（電）九四一ー九六四九

雁帛往来

▽十一月二十七日。俳句文学館の図書委員会に初めて出席。新委員は小椰精以知さんと幡谷東吾さんと予の三人であったが、幡谷さんの急死によって二人となった。

▽十一月二十八日。電通葉山寮での連句会に出席、歌仙一巻を捌く。

▽十一月二十九日。朝八時半、葉山の寮を出て、西蒲田の蓮華寺に直行。幡谷東吾さんの葬儀に参列。

▽十二月二日～五日。郷里熊本に墓参。阿蘇内の牧温泉に泊り、竹田まで行き、岡城址に登る。

▽十二月六日。雪降る。関口連句教室に出席。本日、松本勢も加え連衆多し。歌仙一巻捌く。

▽十二月二十日。柏連句会に出席。連衆十六名。二十韻一巻捌く。

▼一月三日、アメリカ・トーランス居住の竹本義人博士より来翰。二十韻の愛称を双十としてはという提言あり（二十八頁参照）。竹本博士については「南柏雑記」13で紹介ずみだが、アメリカでも二十韻が愛用されるのは嬉しい話である。

▽一月十五日、丸の内画廊で柴原睦夫氏主催の初懐紙が興行された（十四頁参照）。齋藤吾朗氏の即席画に興じ、和やかで賑やかな会となった。

▽編集部宛てに、評論・作品その他の原稿をお送り下さい。原稿の取捨は編集部におまかせ下さい。

季刊「連句」　第二十号

昭和六十三年三月一日発行

編集人　東　明雅

発行人　東　明雅

季刊「連句」発行所

〒277 柏市つくしが丘二ノ二ノ一二　東方

電話　〇四七一（七五）一一九二

振替口座　東京七ー五二一三三

印刷所　㈲岩田印刷所

〒277 柏市豊住一ノ一ノ一二

電話　〇四七一（七四）〇一八三

定価　一部　五〇〇円　送共

一年　二〇〇〇円　送共

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に必須の知識をすべて網羅！初心者から研究者まで使える本邦初の連句辞典

再版　B6判　三五二頁　三五〇〇円

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである

収録項目例

〈用語篇〉挙句　会釈　一座一句　有心　打越　思いなし　表八句　懐紙　歌仙　軽み　切字　景気　五句目　差合　去　式目　四春八木

〈人名篇〉天野雨山　伊藤松宇　上田聴秋　鵜沢四丁　小林見外　下平可都三　関為山　高橋玄一郎　高浜虚子　中村俊定　野村牛耳

水原秋桜子編

俳句鑑賞辞典　二三〇〇円

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編

現代俳句鑑賞辞典　二八〇〇円

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編

季語辞典　二八〇〇円

日本の季節にまつわる言葉をスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修

難解季語辞典　四五〇〇円

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典　B5　一九〇〇〇円　国語学会編

国語慣用句大辞典　A5　六八〇〇円　白石大二編

国語慣用句辞典　B6　二三〇〇円　白石大二編

国語史辞典　B6　三五〇〇円　林巨樹他編

日本語語源辞典　B6　一八〇〇円　堀井令以知編

京都語辞典　B6　一八〇〇円　井之口・堀井編

擬音語擬態語辞典　B6　三五〇〇円　天沼寧編

隠語辞典　B6　三八〇〇円　楳垣実編

近世上方語辞典　A5　一五〇〇〇円　前田勇編

花柳風俗語辞典　B6　二三〇〇円　藤井宗哲編

新語俗語辞典（明治・大正）　B6　三八〇〇円　樺島忠夫他編

難訓辞典　B6　三二〇〇円　中山泰昌編

名乗辞典　B6　二八〇〇円　荒木良造編

名数数詞辞典　B6　四五〇〇円　森睦彦編

あいさつ語辞典　B6　二八〇〇円　奥山益朗編

新版ことば遊び辞典　B6　五八〇〇円　鈴木棠三編

類語辞典　B6　二八〇〇円　鈴木・広田編

類義語辞典　B6　二三〇〇円　徳川・宮島編

表現類語辞典　B6　四八〇〇円　藤原与一他編

新版文章表現辞典　B6　二九〇〇円　神島・村松編

東京堂出版　電話03—233—3741～2　101東京都千代田区神田錦町3-7